

安楽死再考 (Reconsidering euthanasia)

オバーグ・アンドリュース

要旨

ある人の固有の生命を取り去ることは、膨大な苦しみを緩和する助けとなり得るにもかかわらず、一西洋と西洋の影響下にある文化圏において最も顕著であるが—安楽死計画と関連する見方を刺激し、またそうした計画を排除する多くのものを即座に引き起こし、道徳的不和を起こさせるような問題を残すことになる。以下では、自発的な安楽死に焦点を合わせ、自発的な安楽死が自殺とはむしろ異なった意味で考えられるべきものであることを提起しつつ、この問題の通俗的な諸概念がより明瞭な分析を必要としていることを論じる。そしてまた、歴史的な視座および我々の変化しつつある現代の姿勢が考えられるに至って、これらの実践に対する近代的な偏見は、貧困な地盤の上におかれているにすぎないということがわかるであろう。安楽死への権利は、その道徳的な容認を確証する助けとなり、またそれに加えて、自殺が潜在的な選択肢であると合理的に考えられる限りでの諸条件といった、より大きな理解についても同様に論じられる。

キーワード

安楽死、歴史的傾向、死の権利、切腹、自殺、自発的な安楽死